【論文題目】

人と動物の関係性の社会学
―東日本大震災における飼い主とコンパニオンアニマル

梶原はづき

【論文の目次】

1章　人と動物の関係性の社会学　5
1.1.1　人と動物の関係性を問う　5
1.1.2　災害の場で立ち現れるもの　6
1.2　論理的アプローチ: 批判的実在論を導入する意義　7
1.2.1　批判的実在論の特徴　7
1.2.2　なぜ本論文に批判的実在論が有効か　8
1.3　経験的アプローチ: 批判的方法論的多元主義　9
1.3.1　批判的方法論的多元主義　9
1.3.2　質的方法（インテンシヴな手続き）　10
1.3.3　量的方法（エクステンシヴな手続き）　11
1.4　本論文の構成　11

2章　先行研究の中での本論文の位置　15
2.1　社会学のサブフィールドとしての Human-Animal Studies（HAS）の出現　16
2.1.1　Human-Animal Studies（HAS）はいかにして形成されてきたのか　16
2.1.2　アメリカ社会学会の中でのサブフィールドの確立 18
2.1.3　社会学における Human-Animal Studies（HAS）の到達点と課題　27
2.1.4　飼い主とコンパニオンアニマルの関係性に焦点を当てる研究　28
2.2　災害と動物　31
2.2.1　海外の災害と動物に関する研究　32
2.2.2　日本の災害と動物に関する研究　35
2.3　批判的実在論　37
2.3.1　批判的実在成立の経緯　37
2.3.2　批判的実在論の特徴　44
2.3.3　定理から応用へ　批判的実在論の調査研究への接続　48
2.4　本論文の位置　50

3章　研究の方法　52
3.1 批判的実在論の応用　52
3.2　インテンシヴな方法　52
3.2.1　半構造化インタビュー　52

3.2.2　参与観察　56
3.2.3　その他のフィールドワーク　57
3.3　エクステンシヴな方法（アンケート調査）　57
3.4　研究の妥当性　59
3.5　倫理的配慮　61

4章　津波災害をコンパニオンアニマルと共に生き抜く　63
4.1 災害という非日常から関係性を照射する　65
4.1.1　人と動物の相互作用はあり得るか　66
4.1.2　意味の多様性　68
4.2　津波を経験した2人のライフストーリー　68
4.2.1　すべてバロンを中心に動いた　鈴木良一さんのライフストーリー　69
4.2.2　ライフストーリーから見えてくる鈴木さんとバロンの関係性　84
4.2.3　娘が大学に行けば犬と二人暮らし　村上悟さんのライフストーリー　86
4.2.4　ライフストーリーから見えてくる村上さんとクッキーの関係性　96
4.3　語られる関係性　98
4.3.1 子どもの代わり/ 毛皮を着た子ども―交差する意味　98
4.3.2 死に直面したとき　103
4.3.3 コミュニティの中に動物がいる意味　107
4.4 コンパニオンアニマルと生き抜くための戦略　110
4.4.1　行動から関係性を読み解く　110
4.4.2　飼い主の行動の4つの側面　135
4.5　生を紡ぐコンパニオン　136

5章　原発事故の災禍をコンパニオンアニマルと惑う　139
5.1　原発事故を経験した飼い主のライフストーリー　142
5.1.1　自分が今生きていることの意味がわからない
佐藤ヒトミさんのライフストーリー　142
5.1.2　ライフストーリーから見えてくる佐藤さんと動物たちの関係性　156
5.2　グローバリゼーションの外側にある関係性　158
5.2.1　「ペット」ではなく「ただの動物」でもなく　160
5.2.2　世界の境界が決壊するとき　167
5.2.3　不確かな現実のアンカーとして　175

5.3　コンパニオンアニマルと世界の終わりの淵に立つ
　　―行動から関係性を読み解く　180
　5.3.1　飼い主たちの行動の 3 つの側面　180
　5.3.2　飼い主たちの行動の複雑さ　195
　5.3.3　原子力災害の本質的な問題　206
　5.3.4　「動物の幸せに対するルーラルな哲学」　221
5.4　大地と繋ぐコンパニオン　230

6 章　災害という日常が壊れた場所で立ち上がる関係性　232
6.1　津波災害と原子力災害―関係性の違いを生むもの　234
　6.1.1　導出された 2 つの概念　235
　6.1.2　差異はどこからくるのか　241
6.2　アクチュアルな領域での抑圧―共通していたものは何か　244
　6.2.1　津波地域　245
　6.2.2　原発事故地域　246
6.3　根底にある構造　250
　6.3.1　コンパニオンアニマルの生命の価値の矮小化と崇高化　251
　6.3.2　日本社会における人と動物の関係性の捉え方　252
6.4　なぜ人間は別の種と結びつき共に暮らすのか　258

7 章　結論　260
　7.1　現代日本社会における人と動物の関係性―我々の考える「社会」とは何か　260
　7.2　本論文の限界と今後の展望　266

注　270

文献リスト　276

謝辞　314

付録　317

【博士論文要約】

1990 年代以降、欧米では、人と動物の関係性を研究する Human-Animal Studies（HAS）という学際的な領域が発展し、社会学のサブフィールドとして確立されつつある。一方日本では、人と動物の関係性を社会学的に考察する研究は非常に少ない。本論文の目的は「現代日本社会における人と動物の関係性の特性は何か、そしてそれは社会にどのように影響しているか」という問いに取り組み、人と動物の関係性に対する理解を深め、ひいては日本における「人と動物の関係性の社会学」の領域の確立に寄与することである。本論文では、東日本大震災の人とコンパニオンアニマルに焦点をあて、災害の場で立ち現れる関係性から、平時の日常に埋め込まれた人と動物の関係性の構造を逆照射する形で明らかにした。また事象を生起させている深部の構造を分析するための論理的アプローチとして、批判的実在論を導入する。飼い主、動物ボランティアなど関係者計 65 名へのインタビュー、補足的な 74 名へのアンケート調査のデータから、津波災害と原子力災害で避難した飼い主が、コンパニオンアニマルとの関係性をどのように語っているか、そしてその関係性の表出として、災害時にどのように行動したのかを記述し分析していった。災害だからそこ見えてくる飼い主とコンパニオンアニマルの関係性を探求し、両地域の関係性の差異と、飼い主の経験において共通する問題は何かを考察した。結果として、災害のほとんどの場面で、コンパニオンアニマルの生命の価値の矮小化が無意識に行われ、また一方では動物救助に集中する活動家による動物の命の崇高化が行われ、飼い主とコンパニオンアニマルの関係性は重視されなかったことを明らかにした。その因果メカニズムは、「動物愛護」という曖昧で情緒的な概念でコンパニオンアニマルを捉え、商品としてのコンパニオンアニマルと人の関係性以外想像し得ない社会構造にあることを指摘した。

第 1 章

第 1 章では、本論文の問いと目的、研究の理論的アプローチおよび経験的アプローチを述べた。現代社会の中で、人と人以外の動物は複雑に関係しあいながら共存している。家庭の中で家族として暮らすコンパニオンアニマルは、飼い主と個別の関係を築くという点で、人と動物の関係性を探求する端緒として最も重要である。しかし、日本の社会学の中では、人とコンパニオンアニマル

の関係性は、本格的に研究されてこなかった。本論文の問いは「現代日本社会における人と動物の関係性の特性は何か、そしてそれは社会にどのように影響しているか」であり、その問いに答えることによって人と動物の関係性に対する理解を深め、「人と動物の関係性の社会学」の領域の確立に寄与することを目的とする。また、理論的アプローチとして、イギリスの哲学者 Roy Bhaskar（1944-2014）が提唱した社会科学論である批判的実在論（Critical Realism）を選択した根拠を示した。最後に本論文の構成を示した。

第 2 章

第 2 章では、先行研究を概観した。欧米では 1990 年代以降、Human-Animal Studies（HAS）という学際的な領域が確立されてきた。2002 年にはアメリカ社会学会の中に、Animals and Society セクションが正式に認められ、社会学においても HAS はサブフィールドとして認められつつある。Animals and Society セクション設立の経緯を中心に社会学の枠組みで研究の流れを概観し、現在の HAS の主な研究を示した。権威ある社会学者からの、動物の権利などは「小さな問題だ」という批判に対して、HAS の領域の確立に力を注ぐ社会学者たちは反論、反証しながらセクションの申請をし続けた。議論の中心にあったのは、Mead がシンボリック・インターアクションの視点から、人と動物の間に引いた「強固な線」であった。加えて、本論文のテーマである飼い主とコンパニオンアニマルの関係性に焦点を当てる研究が、どのような視点でされているかを検討した。また、本論文は災害社会学の一部でもあるので、災害社会学の中で災害と動物の先行研究を概観した。本論文をメタ理論として基礎付ける批判的実在論については、科学哲学論争を踏まえ登場した成立の経緯を、Bhaskar の基本文献に沿って述べた。

批判的実在論は実証主義対解釈主義という二元論へのオルタナテゥヴで革新的な、「新たな社会科学を創造する研究構想」（佐藤 et.al. 2013: 2）として期待される思想であり、主に英語圏で多領域の研究者が注目し研究に応用し始めている。その特徴を簡潔に述べると、その基本的な世界の捉え方は「実在の二つの側面」と「実在の 3 つのドメイン（領域）」によって説明される。

実在の二つの側面

批判的実在論では、世界には私たちの認知や意識から独立して存在する「自存

的次元」(intransitive dimension) と、私たちが主観を介して理解する認識論的な側面、すなわち「意存的次元」(transitive dimension) があると考える。

実在の 3 つのドメイン（領域）

実在は 3 つの領域で成り立っている―これこそが Bhaskar の批判的実在論の最も重要な世界の捉え方である。

経験的ドメイン（empirical domain）　人々が経験する世界
アクチュアルドメイン（actual domain）　現実的事物または出来事の領域
実在的ドメイン（real domain）　出来事を生み出す構造とメカニズム

実在世界は、上記の 3 つのドメインが相互に影響しあい成り立っている。批判的実在論は、出来事を生み出す歴史的、構造的メカニズムを、アブダクション（理論的再記述）とリトロダクション（溯源的推論）の推論方法を使って分析し、説明することを目的としている。

以上の研究レビューによって、本論文の社会学研究としての位置を明確にした。本論文は Human-Animal Studies (HAS) の一部であると同時に災害社会学の側面も持ち、批判的実在論をメタ理論として導入した、日本の社会学においても、災害研究においても、希少性を持つ研究である。

第 3 章

第 3 章では、研究の方法について述べた。本論文では主に質的研究法を用い、一部補完的な量的調査を行っている。インタビュー、参与観察、フィールドワーク、アンケート調査について、具体的な調査地、調査期間、調査対象者等の詳細を示し、最後に研究方法の妥当性と本研究で行った倫理的配慮について述べた。

第 4 章から第 6 章まで

第 4 章から第 6 章までは、災害だからこそ見えてくる飼い主とコンパニオンアニマルの関係性を、インタビュー、フィールドワークから得たデータから探求したが、その際に、本論文の理論的アプローチである、批判的実在論を研究実践に応用している。経験的ドメイン（empirical domain：人々が経験する世

界）から、アクチュアルドメイン（actual domain：現実的事物または出来事の領域)、実在的ドメイン(real domain:出来事を生み出す構造とメカニズム)へと遡り、実際に目に見える出来事から、世界の深部にあってその出来事を生起させている構造とメカニズムまでを、アブダクション（理論的再記述）とリトロダクション（溯源的推論）の推論方法を使って説明することを試みた。

本論文では、災害の個人レベルの経験を重視し、まず4章、5章でライフストーリーを用いて人々の経験を記述したが、同時に参与観察その他のフィールドワークで得たデータや、報道などを併用して全体像を俯瞰する作業を行い、経験的ドメインとアクチュアルドメインを切り離すことなく記述することに勤めている。さらに6章では、飼い主たちの経験の根底にある構造を考えていく。この部分は、アブダクションとリトロダクションとを使って、出来事を生起させる構造とシステムを推論していく部分として位置付けられる。

第4章

第4章では、津波災害で避難した宮城県と岩手県の飼い主たちが、コンパニオンアニマルとの関係性をどのように語っているか、そしてその関係性の表出として災害時にどのように行動したのかを、飼い主と関係者28名へのインタビューから、記述し分析した。

津波地域の飼い主は、ほとんどの人が動物を「子ども」と表現するが、その意味は多様であった。死に直面したとき、コンパニオンアニマルはある飼い主たちにとって「命を助けてくれた動物」となり、「家族との死別を支える動物」ともなっていた。避難生活が日常化していく仮設住宅の生活では、「人と人をつなぐ動物」や「人とこれからの生活をつなぐ動物」の働きもしていた。

4章の終わりに、津波災害を生き抜いた飼い主たちとコンパニオンアニマルの関係性の特性は、独自に生成した「生を紡ぐコンパニオン」という概念で表せることを提示した。それを定義すると、「飼い主が生を紡ぐためにコンパニオンアニマルが生きる目的になり、全ての選択の中心になっている」という関係性である。この場合、コンパニオンアニマルはその人を生かす生の営みの中心的存在になっている。心臓が生を紡ぐために血液を送り出すように、その人の人生に不可欠なものとして、人生の経験の中に脈打つ関係性であるとも言える。飼い主と動物は個別密着型であり、身体的接触により互いの鼓動が呼応し合うような関係である。

第 5 章

第 5 章では、原子力災害で避難した福島県の飼い主たちのコンパニオンアニマルとの関係性をどのように語るのか、そしてその関係性の表出として、災害時にどのように行動したのかを、津波災害と比較しながら記述、分析した。飼い主と関係者 37 人のインタビューに加え、74 名のアンケートのデータも記述統計的に使用した。この地域の飼い主たちにとって、ともに暮らす動物は、都会的ないわゆる「ペット」と「ただの動物」の間にいる、動物らしい本能をある程度保持した存在として語られている。動物と自然の中で大きな家族の一部として結びついて暮らす世界が、原発事故で決壊したとき、動物の命の脆弱性に気づきより大切になったと語る飼い主もいるし、また、何も変わらないと語りながら、関係性を変わらないように維持するために多大な努力をしている飼い主もいた。先行きの定まらない避難生活が長く続く中で、コンパニオンアニマルは、「家族をつなぐアンカー」や「人と故郷をつなぐアンカー」となっていた。

5 章の終わりに、原発事故地域の飼い主たちの語りと行動に表れている関係性の特性を、「大地と繋ぐコンパニオン」という概念で提示した。それを定義すると、「飼い主がコンパニオンアニマルの中にある野生性と自然の中にいるという環境を尊重することにより、動物が飼い主と家族、土地、環境を繋ぐ存在となっている」という関係性である。この場合、コンパニオンアニマルは飼い主にとってその土地、環境に、結びついた存在であり、基本的に動かすことができない。自分がよって立つ大地のように、あって当たり前だが、失われたら世界が欠けてしまう。身体的な接触を密にするような個別密着型ではなく、飼い主と役割を持った動物が大きな家族の中で周囲の自然とつながっている、環境一体型の関係である。

第 6 章

第 6 章では、本論文の問い、「現代日本社会における人と動物の関係性の特性は何か、そしてそれは社会にどのように影響しているか」に立ちもどって、災害という日常が壊れた場所で立ち上がる関係性を考察している。その際、批判的実在論の推論の方法を用いて考察していった。まず 4 章と 5 章で記述した津波災害地域と原子力災害地域の飼い主の経験的ドメイン、つまり語られた関係性と、その関係性の表出である飼い主の行動からわかったことを再構成した。

6.1 では、津波災害地域と原子力災害地域の飼い主の関係性を時系列で整理し、「生を紡ぐコンパニオン」、「大地と繋ぐコンパニオン」として概念化した両者の

関係性の差異に注目して、その差異は何によって生起するのかを考察した。そして、津波災害と原子力災害地域の飼い主とコンパニオンアニマルの関係性の特性を表 6-1「津波災害地域と原子力災害地域の飼い主とコンパニオンアニマルの関係性」にまとめた。

表 6-1 津波災害地域と原子力災害地域の飼い主とコンパニオンアニマルの関係性

時間経過→

	災害前の関係性	災害時の関係性	災害時の飼い主の行動	災害後の関係性
津波災害地域	多様な意味の「子ども」	「命を助けてくれた動物」 「家族との死別を支える動物」 「動物との死別を支える動物」	1）システムに対峙する 2）オルタナティブな方法を探す 3）破壊された住居に戻る 4）沈黙する	「人と人をつなぐ動物」 「人とこれからの生活をつなぐ動物」
	関係性の特性を表す概念	生を紡ぐコンパニオン	関係性のタイプ	個別密着型
	概念の定義	飼い主が生を紡ぐためにコンパニオンアニマルが生きる目的になり、全ての選択の中心になっている		
原子力災害地域	「ペット」と「ただの動物」の間	「より大切な命/ 努力による関係維持」 「収まりどころのない悲嘆」 「都会的な価値観との出会いによるアンビバレントな感情」	1）同行避難する 2）残してくる 3）抵抗する	「家族をつなぐアンカー」 「人と故郷をつなぐアンカー」 「生活再建のためのアンカー」
	関係性の特性を表す概念	大地と繋ぐコンパニオン	関係性のタイプ	環境一体型
	概念の定義	飼い主がコンパニオンアニマルの中にある野生性と自然の中にいるという環境を尊重することにより、動物が飼い主と家族、土地、環境を繋ぐ存在となっている		

表 6-1 は、向かって左から右へ時間的な経過を表しているが、飼い主とコンパニオンアニマルの関係性が、その時系列で全く別のものに変容していったということを表してはいない。例えば津波地域であれば、コンパニオンアニマルは災害後も「子ども」としての関係性も保ちつつ、飼い主にとって「命を助けてくれた動物」としての意味が加わっており、仮設住宅のコミュニティという場面では、「人と人をつなぐ動物」にもなりうる。災害の前、災害時、災害後の関係性は、前のものが消えて新しいものに置き換わるのではなく、意味が重層化していくプロセスであると考える方が現実に即している。

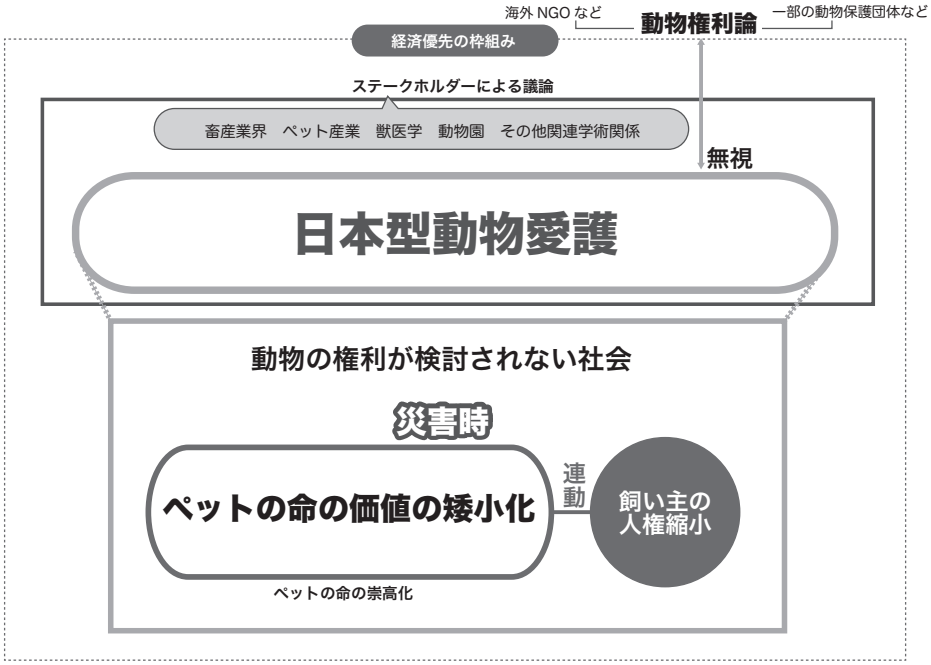
6.2 では、なぜ飼い主とコンパニオンアニマルの関係性が、災害を経て 2 つの概念で表わされるようなものになったのかを探求する。6.1 での考察を踏まえ、経験的ドメインを取り囲むアクチュアルドメインにおいて、人間中心主義、政策と現場のギャップ、原発産業優先のパラダイムが、災害時にさらに強く結びつく飼い主とコンパニオンアニマルの関係性を無視し、支援から飼い主と動物を排除し抑圧する構造になっていたことを述べる。

6.3 では、何が人と動物の関係性を無視させるのか、その根底にはどんな構造があるのかという問いに答えることで、実在的ドメイン（real domain：出来事を生み出す構造とメカニズム）へと推論を深めていった。

災害のほとんどの場面で、コンパニオンアニマルの生命の価値の矮小化が無意識に行われ、また一方では動物救助に集中する活動家による動物の命の崇高化が行われ、結果として飼い主との関係性は重視されなかった。

日本社会における人と動物の関係性の支配的な捉え方である、経済優先の論理の範囲内にある動物愛護論では、災害という日常が壊れた場所で立ち上がる人と動物の関係性は捉えることができない。その齟齬が飼い主とコンパニオンアニマルの関係性が無視される背景にあるという、本論文で得た新たな知見を示した。ここまで述べてきた構造を図 6-1「日本型動物愛護論の構造」に図示する。

図 6-1 日本型動物愛護論の構造



6 章の最後に、これまでの考察を通じてさらにたどり着いた問い、「なぜ人間は別の種と結びつき共に暮らすのか」を示し、若干の考察を付した。

第 7 章

第 7 章では、災害という場をフィールドに選んだからこそ明らかになった現代日本社会における人と動物の関係性を述べ、社会学の新しい領域、Human-animal studies（HAS）としての本論文の意義を述べた。最後に、本論文の理論的、方法論的限界と今後の展望について述べた。

本論文第 6 章では、日本型動物愛護論では、経済の論理が優先され、それが災害時に飼い主とコンパニオンアニマルの関係性が無視される根底にあることを示した。では、どのような理論を想定すれば、災害時のような非常時にも、飼い主と動物の関係性が無視されず、両者を包摂できるのかが、今後の検討課題として残っている。

批判的実在論に基づいた推論の過程で、日本型動物愛護論に代わる様々な人

と動物に関する理論の検討も行った。しかし、どの理論を拡張しても人間中心か、動物中心に傾いてしまい、飼い主とコンパニオンアニマルの関係性を中心に据える理論は未だ構築されていないのが現状である。最も有望だと思われるのは、動物の市民権論（Donaldson and Kymlicka 2011=2016）であった。これは、動物の権利を、単なる生きる権利や、苦痛から自由である権利だけでなく、市民権（シティズンシップ）にまで拡張するべきという考え方だが、人と動物の強い結びつきについての位置付けが成熟しているとまでは言いがたい。

災害時に人と動物の関係性が無視されるような事態が繰り返されないためには、現実に社会の中で人と動物が結んでいる関係性そのものに意味を見出し、あらためて位置付ける必要があるだろう。本論文で明らかにしたような、人とコンパニオンアニマルとの強い結びつきを、「新しい権利」として提示することは、その第1歩となるはずである。

そこで、その権利を、“Bonding Rights”（結びつきの権利）と名付けることを提案し、実践への適用へ向けての議論の端緒としたい。今後はこの“Bonding Rights”（結びつきの権利）の輪郭と範囲を明確化するよう努め、一般社会に受け入れられる概念になるよう、精緻化の努力を続けていく。

Human-Animal Studies（HAS）は、1970年代に生まれた動物の解放と、動物の権利、反種差別の思想に呼応して興隆してきた学際的な学問領域である。社会科学、人文科学に足場を置くHASは、人間と人間以外の動物の間の相互作用と関係を研究し、人が動物に付与する意味の探求と、その脱構築化を目指してきた（DeMello 2012: 4,14）。

2章で述べたように、アメリカを中心とした英語圏のHAS分野の社会学者たちは、社会学に引かれた人と動物の間の「強固な線」を批判し、研究によってそれを越えようと取り組んできた。

本論文は災害社会学という「人間の社会問題」を研究する学問分野で見落とされてきた、コンパニオンアニマルとともに被災した人々に焦点を当てることにより、Charles Perrow(Perrow 2000: 473)に代表されるような、「古臭い型にはまった社会学者たち（conventional sociologists)」(Sanders 2003: 406)が人と動物の間に引いてきた線自体が、コンパニオンアニマルだけでなく、人間である飼い主をも排除する構造になっていたことを示唆した。

本研究では、社会学における地平を、人と動物に引かれた「強固な線」を超え、少なくともコンパニオンアニマルにまで拡張することは、十分検討に値す

る命題であることを、災害の緊急時や復興期に多くの飼い主が排除された現実の社会問題との関連で指し示した初めてのもので、その意味でも社会学の枠を押し広げることに貢献したと言える。さらに、なぜ人間は別の種と結びつき共に暮らすのかという問いを発することで、人間が他の種と原基的に結びつくことを希求する存在であるのかをHASの領域を越えた提起として投げかけた。

1979年、アメリカの社会学者Clifton D. Bryantは、社会学者は人間社会における他の動物の役割を認識するべきだと主張し、社会の中の「Zoological Connection」(動物学的な関係)に社会学的関心を向け、この「無視された分野」を研究しようと呼びかけた（Bryant 1979: 417)。本論文は、Bryantの呼びかけに対する、日本からの応答である。今後も、社会学に引かれた「強固な線」を越え、我々の社会がどこまで行けるのか、その地平を追いかけていきたい。

最後になったが、この研究は、飼い主の方たち、また動物ボランティアの方たちなど、多くの方々の協力がなければ成立しなかった。調査地で次の協力者を紹介してくださった方、車で1日中移動する私の昼食を心配しおにぎりを持たせてくれた方、仮設住宅の脇で作った野菜をたくさんお土産にくれた方、今も1人1人顔が、そして、そばにいた動物たち浮かぶ。全ての調査協力者の方たちに、心からの感謝を申し上げる。

参考文献

Bhaskar, R. (1997). *A realist theory of science*. London ; New York: Verso. First published 1975. Leeds: Leeds Books. （= 2009 式部信　訳『科学と実在論 ： 超越論的実在論と経験主義批判』　叢書・ウニベルシタス　東京：法政大学出版局）

Bhaskar, R. (1998). *The possibility of naturalism : A philosophical critique of the contemporary human sciences* (3rd ed.). New York: Routledge. First published 1979. Hemel Hempstead: Harvester Press Ltd. （= 2006 式部信　訳『自然主義の可能性 ： 現代社会科学批判』　京都：晃洋書房）

Bryant, C. D. (1979). The zoological connection: Animal-related human behavior. *Social Forces, 58*(2), 399-421.

Danermark, B., Ekstrom, M., & Jakobsen, L. (2002). *Explaining society: An introduction to critical realism in the social sciences.* London: Routledge. （=2015 佐藤春吉　訳『社会を説明する ： 批判的実在論による社会科学論』京都：ナカニシヤ出版

DeMello, M. (2012). *Animals and society: An introduction to human-animal studies.* New York: Columbia University Press.

Donaldson, S., & Kymlicka, W. (2011). *Zoopolis: A political theory of animal rights.* Oxford: Oxford University Press.（=2016 青木人志他 訳『人と動物の政治共同体：「動物の権利」の政治理論』東京：尚学社）

Perrow, C. (2000). An organizational analysis of organizational theory. *Contemporary Sociology, 29*(3), 469-476.

Sanders, C. R. (2003). Actions speak louder than words: Close relationships between humans and nonhuman animals. *Symbolic Interaction,* 26(3), 405-426.

佐藤春吉・松田亮三・加藤雅俊　2013 先進プロジェクト研究２０１３年度年次報告書「社会科学の理論的・哲学的基礎の探求－批判的実在論を参照点と

して－」 立命館大学　http://www.ritsumei.ac.jp/file.jsp?id=13847　（2017 年 12 月 13 日閲覧）